

規則様式第2号

政 務 活 動 報 告 書

令和6年1月31日

丹波市議会  
議長 垣内 廣明 様

会 派 名 創生会

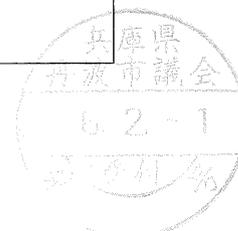
代表者氏名  
又は議員名 近藤 憲生

このたび、政務活動を実施しましたので、丹波市議会政務活動費の交付に関する規則第4条第2項の規定により、次のとおり報告します。

記

活 動 (調査) 期 間	令和6年1月17日から令和6年1月18日まで
活動 (調査) 先	伊万里市民図書館 佐賀市役所
参 加 議 員	山名 隆衛 大西 ひろ美
活動 (調査) 内 容 の 概 要	伊万里市民図書館と「図書館フレンズいまり」の活動 市民と行政の連携について 佐賀市 農福連携について

※議員それぞれの報告書及び参考資料を添付



佐賀県伊万里市 令和6年1月17日(水)  
図書館館長、図書館フレンズいまり会員7名

伊万里市民図書館にて

### 伊万里市概要

佐賀県の西部にある市。かつて伊万里港から積み出しを行っていた磁器（伊万里焼）で有名である。

人口 52,428 人 面積 255.25 km<sup>2</sup>

### テーマ 伊万里市民図書館と「図書館フレンズいまり」

伊万里町立図書館が昭和42年の大水害で被害を受け、中央公民館の一室に仮住まいして以後、20年以上その状況が続いていた。その状況を憂いた子育て中の母親たち「母と子の読書会」が中心となって、昭和61年「図書館づくりをすすめる会」を立ち上げ、「学びながら提言する」活動を続けた。新しい図書館を多数見学し、福岡県苅田町の、滞在型図書館に感動した。その後、苅田町立と同じ設計者が伊万里も担当することになった。設計者より、「一緒にやりましょう」との打診があり、すすめる会だけでなく、図書館の利用者等多くの団体に設計者は何度もヒアリングし、ともに設計段階から市民が関わった図書館である。

平成3年自動車図書館「ぶっくん」の巡回開始。平成5年に2号も開始した。

平成4年図書館建設準備室を設置し、「図書館づくり伊万里塾」を8回開催。

平成6年起工式が行われ、平成7年「伊万里をつくり 市民とともにそだつ 市民の図書館」を目標に、図書館が開館した。

### 伊万里市民図書館

新世紀の図書館を目指して、目的が掲げられている。

- ①自由で公平な情報を提供し、市民の知的自由をまもる図書館、
- ②将来の伊万里をつくる子ども達に夢をそだてていく図書館、
- ③本のある出会いの広場、文化を育むオアシスとしての図書館、
- ④全ての市民に開かれた市民のライフスタイルを高める図書館

- ・書棚は、高さ170cmで車いすでも見やすくしている。こどもの本は、140cmの高さにしている。
- ・毎週行う選書会議においては、職員で各分野の担当を決め、それぞれ1冊決めて選んでいることにより、「本のバランスがいい」と言われている。
- ・伊万里市には映画館が無く、映画上映を行い、それに関する関連本を入り口近くに展示している。
- ・市民の声により、書斎のようなコーナーを設けており、ここは無音である。館内は小さな音でBGMが流れている。
- ・コンセント、Wi-Fiがある。
- ・登り窯のようなお話の部屋がある。

- ・「建設賞」を受賞している。
- ・図書貸し出し数において、令和元年度では一人当たり 7.77 点、コロナ禍令和 4 年度は 6.45 点である。全国平均は 5 点。

- ・貸出数増の取組

- ①団体貸し出しの促進
- ②セット貸出企画（ほんのお歳暮、時代小説等シリーズ貸し、わくわくパック）
- ③貸出期間延長（爆借りキャンペーン）4 週間に延長
- ④主催・共済等のイベント開催時に、関連本の展示やブックトーク
- ⑤司書おすすめの新刊本の紹介（図書館 HP, プリント、CATV 放送）
- ⑥企画展示（館内 40 ヶ所）

- ・ビジネス支援の展開（相談デスク＝レファレンスデスク）を通して、有田焼万華鏡や万年筆の開発で起業の成功があり、平成 20 年「図書館で夢を実現します大賞」を受賞した。

- ・市議会図書室にも、図書館司書が常にいろんな行政資料を定期的に入替し、議員も活用している。

## 図書館設置条例の全部改正

- ・旧条例

第 1 条 「図書館法第 10 条により、伊万里市立図書館を伊万里市松島町 73 番地に設置する。」

目的 第 2 条「教養調査研究・レクリエーションに資する」

- ・新条例 伊万里市民図書館設置条例

**【設置及び目的】**

第 1 条 伊万里市は、すべての市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展のため、自由で公平な資料と情報を提供する生涯学習の拠点として、伊万里市民図書館を設置する。

## 参考；丹波市立図書館条例

第 1 条 図書館法(昭和 25 年法律第 118 号。以下「法」という。)第 10 条の規定に基づき、図書、記録その他必要な資料(以下「図書館資料」という。)を収集し、整理し、保存して、市民の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的として、丹波市立図書館を設置する。

## 自動車図書館「ぶっくん」

平成 5 年からは、2 台体制で、職員司書 2 名、運転手 2 名で、毎週火曜～金曜まで、姉妹 76 ステーションを計画的に巡回している。20 分程度滞在し、本の貸出と保育園等では読み聞かせを行う。1 台に約 2500 冊積載。「人とのふれあい・交流を大切に、市内全域サービス」

## 「図書館フレンズいまり」

- ・「私たちが生んだ図書館を、しっかり育てなければ無責任になる」との思いから、友の会「図書館フレンズいまり（以下フレンズ）」が誕生した。
- ・「めばえの日 ぜんざい会」や、「としょかん★まつり」を市との共催で行っている。
- ・古本市や館内設置の自販機などで「稼ぎ」、図書館ボランティアグループへフレンズから助成金を出している。
- ・令和5年度「第18回マニフェスト大賞優秀成果賞」を受賞。
- ・フレンズの仲間は年齢を重ね高齢化してきており、新しい仲間も加わって活動が多彩になっているが、次代を育てることが課題である。
- ・行政からの支援は受けないことを誇りとしている。

## フレンズの力

- ①指定管理制度で図書館運営をするのではなく、市直営を望んでいる。
- ②館長に対して、図書司書の免許を推奨している。
- ③片岡繁男（郷土の詩人）の文学館開設のため、100万円以上の寄付が集まった。
- ④ブックスタートは、市政60周年記念で始まり、基金として運営されている。お亡くなりになられた後、寄付として社協にされる方が多いが、ブックスタートを寄付先に選んでいただく活動をしている。

## 所感

図書館とは、貸し出しがその主な内容であり、滞在型という言葉は初めて知った。滞在型により、1日図書館で過ごせるように様々な工夫がある。そこでのつながりも深まっていくと想像する。

建設された後も、この図書館をしっかり育てなければ無責任であるとし、「図書館フレンズいまり」を発足された。海外では、図書館の友の会は当り前のようだが、日本ではあまり馴染みがないように感じる。またあったとしても、要望ばかり、またはお手伝いさんのような会の印象があるが、この会は、「協力と提言」を目的とし、活動が行われている。市民の力で、ここまで成長する友の会や図書館があるのかと驚かされた。

図書館を行政と共に一緒に創り、図書館と共に育ち、図書館のために稼ぐという大きな活動をされている。稼いだ資金でボランティアグループへの助成事業も毎年されており、凄いことと感じる。

図書館のいざという時には、会員約350名のフレンズの力が発展につながる活動をされようとしている。フレンズの会員は市外の方もたくさんおられ、市内にこだわらず会員募集をされているところも力強い活動と感じた。

フレンズの活動も30年を迎え、世代交代が課題であるようだ。小中への読み聞かせが、未来のフレンズにつながることを願っておられる。登り窯の部屋での読み聞かせは、一つのエンターテイメント、ステージのようであり、私もこのお部屋で読み聞かせをしたいと思えるところであった。

図書館では、市民と図書館双方の育ち合いのもと、図書館職員も刺激を受け成長されていると想像する。

ライフステージごとの目標を立てられ、さらに「インクルーシブ読書」を目指し、すべての人の成長と成熟、自己実現を支える教育施設となり、ひとづくり・まちづくりを支える成長する施設を目指されている。

貸し出し数では、平成 29 年度で 8.13 点という驚異的な数字ではないかを感じる。令和 4 年度 6.45 点ではあるが、全国平均 5 点を上回る点数を維持している。丹波市では、約 5.3 点である。また、登録率 89.15% に対し、丹波市は 56.7%。数字ばかりが成果ではないが、一つのきっかけとして、市民への意識付けに繋げるべきではないかと考える。

丹波市の図書館も様々に工夫をされているが、市民とともに育つ図書館という視点が必要と感じた。

図書館とフレンズはパートナーであり、フレンズの役員会には、図書館長が出席し、情報交換や意見交換を行っている。また、市長も、図書館長もフレンズ会員であり、良好な関係の中、成長し続けている。これは、条例改正も今後の発展に大きな力を発揮することに繋がると考える。

佐賀県佐賀市 1月18日(木)

佐賀市役所にて

農業振興課、障がい福祉課、事業所理事長

#### 佐賀市概要

人口 228,054 人の佐賀県最大の都市であり、佐賀県の南東部に位置している。

面積 431.82 km<sup>2</sup>

#### テーマ 農福連携事業について

##### 佐賀市農業の現状

- ・耕地利用率 165% 全国トップレベル 全国平均 94%
- ・中山間地域 米の単作、米と露地野菜の複合経営、ハウレンソウ、ピーマン、みかん
- ・平坦地域 米麦大豆の都市利用型、裏作玉ねぎなどとの複合経営、いちご、アスパラ
- ・令和 4 年度農業産出額 226.7 億円
- ・佐賀市農業基本計画の見直しに伴うアンケート結果を踏まえた今後の対応として、農福連携を知らない人が約 7 割と多く、また、知っている人の中で、取り組まない理由は、制度に対する知識不足からくる不安が 4 割と高いことから、制度の内容、事例などの周知を図る。
- ・人手不足は、調査結果より平成 30 年度は 50% であったが、令和 2 年度 37% に減り改善が図られている。

##### 佐賀市障がい福祉課の取組

H29 年度から、「佐賀市障がい者就労支援施設等異業種連携推進事業」として、「佐賀中部障がい者福祉ネット」に補助金を交付している。

目的は、農業などの福祉分野以外の業種との連携推進をはじめ、福祉商品の売り上げ向上及び障がい者への理解促進を図るための活動を支援することによって、障がい者工賃の更なる向上を図る。

事業内容には、福祉分野以外の業種との連携の推進に関する事業（農福連携事業）、対象施設商品の売り上げ向上に関する事業、障がい者への理解促進に関する事業がある。

農業等との連携によって、障がいの特性に応じた作業や一般就労に向けた体力・精神面での訓練を行い、障がい者の能力や意欲の増進、福祉商品の売上向上や障がい者への理解促進の取組をひき続き行うことによって、障がい者の工賃の向上を目指す。

#### 「佐賀中部障がい者ふくしネット」

従業員数34名で内常勤3名中総務課長が1名含まれ、非常勤1名、パート30名である。37法人51事業所が加盟している。平成14年佐賀市作業所連絡協議会として発足し、平成22年NPO法人設立し、現在の名称へ変更した。

佐賀中部（佐賀市・小城市）地域における障がい福祉活動を支援する者に対して、情報共有化のためのネットワークを構築し、各種研修、事業所支援、調査研究、施策提案等に関する事業を行い、障がい福祉の増進に寄与することを目的とする。

障害者就労支援事業所に通所する障がい者の方のより良い生活を自立・社会参加を目指し、活動を行っている。単体の団体のみでは実施が難しい活動を、それぞれの団体が集まることにより実現していく事を大きな目的とし、各種イベントへの共同出店、請負作業の共同受注、各事業所で生産する福祉商品の共同販売、各種研修会等の実施を行う。

農福連携において、農業分野では働き手不足、福祉分野では障がい者の社会参加や収入向上が課題である。農作業の一部を障がい者が担うなど、農業分野での活躍を通して農業分野と福祉分野双方の課題解決に繋げる取組である。

B型事業所の平均工賃は月額19,855円（全国16,507円）である。

農福連携に取組むと、お互いの強みを活かして相乗効果を得ることが可能となり、WIN=WINの関係を構築することができる。

農福のマッチングにおいてはコーディネーターが、双方へ配慮ある支援をしている。

コーディネーターは、県において2名雇用され、佐賀市では1名が雇用されている。予算は、福祉と農業から歳出されている。

周知は行政がしているが、農家へは、JAや福祉ネットからも情報を届けている。

遊休地の水田除草に、土地改良区が多面的機能交付金を活用して、障がい者を雇用している。

#### 所感

佐賀県は農福連携に力を入れ、佐賀市がそのリーダーとなって事業を展開している。県の支援により、市での取組が促進されている。

その中でも双方をマッチングするコーディネーターの役割がとても重要であり、佐賀市でも一人のコーディネーターを置いている。

コーディネーター自身、福祉をこれまで仕事とされていたのかなと思ったが、以前は事務職で全く初めてということであった。周りのサポートもありつつ仕事をされていた。コーディネーターが障がい者と事業所と農業者の間をうまく調整し、お互いに言いにくいことも話すことができ、気持ちよく連携し、事業が行われている。コーディネーターの存在は重要と考える。

障がい者には、トレーニングファームやミニトレーニングファームがあり、農家へ行く前にトレーニングができ、自分の能力を高めている。このような体験は、必要であり、農家へのハードルが下がり、安心して取り組めるのではないかと思う。

農家の中には、固定概念があり、障がい者にはできないだろうとか、重度の障害をイメージされることが多いようだが、実際はそれぞれに障害も違い、できることも多く、また作業をじっと続けられる方もある。見極めは、JA がすることで農家の不安も減っていると感じる。事業所での支援者は、障がい者の活動を1日で諦めず、続くように励まし、サポートしている。仕事に慣れた障がい者は、一連の仕事を終えると、早く次期の仕事に行きたいと思われることもあるようだ。また、活動により夜はよく眠れるそうである。どちらにとっても WIN=WIN の関係が構築され、素晴らしい事業である。

障がい者を安い労働力の搾取と捉えられてしまう方は、どんなに労働力不足で困られていても農福連携には向かないとされている点も、見習わなければならない視点である。農業分野と福祉分野双方の課題解決につながる取組をされている。



A 伊万里市図書館と「図書館フレンズいまり」

(1) 伊万里市民図書館の概要 視察資料説明でのポイント

●建設時の目標「伊万里をつくり 市民とともにそだつ 市民の図書館」

①開館：平成7年7月7日 旧市立図書館（昭和29年4月）からの建替

29年目を迎える。

②延床面積 4,374.51 m<sup>2</sup>と大きめの施設である。

③総事業費 23億6,480万円（設計費含む）

④職員体制 令和5年4月現在 22名体制（司書11名）

館長1名（任期付公務員4年目）正規職員7名（うち司書5名）

会計年度任用職員14名（うち司書6名、窓口5名運転手1名）

⑤新世紀の図書館を目指して

ア 自由で公平な情報を提供し、市民の知的自由をまもる図書館

イ 将来の伊万里をつくる子どもたちに夢をそだてていく図書館

ウ 本のある出会いの広場、文化を育むオアシスとしての図書館

エ 全ての市民に開かれた市民のライフスタイルを高める図書館

⑥蔵書収容能力 最大48万冊 現在約：42万点

蔵書冊数 約35万1千冊（本館）＋3万6千冊（自動車図書館外）

⑦予算関係 令和4年度決算 1億3千万円

令和5年度予算 1億5千8百万円

内資料購入費 1千5百万円 内図書館改修事業 2千1百万円

⑧図書館の歩みと市民との協働 の歴史説明。

⑨注目の図書館活動

ア 自動車図書館「ぶっくん」巡回

76ヶ所うち市内幼・保・こども園23、小・中学校16

保育園などで「おはなしキャラバン」が職員と一緒に出前おはなし会

イ 朝の読み語り 小中学校100%実施・・・おはなしネットワーク20団体

ウ ビジネス支援の展開（相談デスク＝レファレンスデスク）

有田焼万華鏡や万年筆の開発で起業の成功

エ 議会支援 →議員控室へ地方自治やまちづくり関連図書を30冊展示

⑩伊万里図書館内部の様子。

本を手にとってもらう工夫・・・子供でも手の届く陳列の高さ。

テーマによる展示

本棚の間にある読者席

色々な読者席

「のぼりがまのお部屋」・・・夢が膨らむお話の部屋。

⑪伊万里市民図書館設置条例

「設置及び目的」

第1条 伊万里市は、すべての市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治の発展のため、自由で公平な資料と情報を提供する生涯学習の拠点として、伊万里図書館を設置する。

## (2)「図書館フレンズいまり」

### ①フレンズいまり誕生とその活動

市民図書館開館に当たり、「私たちが生んだ図書館を、しっかり育てなければ無責任になる」との思いから、友の会「図書館フレンズいまり」へ。

「協力と提言」を合言葉とし、会員資格は「伊万里図書館を愛する人」

すすめる会の時代に始まった「めばえの日 ぜんざい会」や図書館の誕生日を祝う「としょかん☆（ほし）まつり」など他、古本市や館内設置の自販機などで「稼い」で、図書館ボランティアグループへフレンズから助成金を出している。

これらの活動に対して、今年度、第18回マニフェスト大賞優秀成果賞を受賞した。

### ②活動における課題

最初から関わった仲間は年齢を重ねて高齢化してきている。また、男性が少ない。新しい仲間も加わって活動が多彩になっているが、次代を育てることも課題である。

③行政の支援を受けないことを誇りとしている。

④図書館も行政ではあるが、私たちにとってはパートナーである。フレンズの役員会には、図書館長が出席し、情報交換や意見交換を行っている。

### ⑤図書館で活動するボランティア団体

おはなしキャラバン・てんとうむしの家・いすの木合唱団・対面朗読草ひばり・伊万里ライオンズクラブ・ボランティア連絡協議会・個人ボランティア

## 視察の所感

市民の図書館として市民と共に育っている状況が感じられる。(行政任せではない所が素晴らしいポイントでした。)

図書の借り数、全国平均で5点のところ、伊万里市民1人当たり6.45点とたくさん借りている。

「子育てを豊かなものにするために新しい図書館がほしい」から活動が始まり、市民のニーズを理解し協働のもと図書館運営が成されている。

行政と市民が知恵を出し合って、図書館を中心に生涯学習の拠点として成功している。

行政からの助成を受けず、自ら稼ぎ、それを支援する心意気の高さに人材の豊かさを感じる所と、館長職員人事まで希望を出す行動力には、敬服する所です。

丹波市も市民の図書館としてのあり方を市民と共に協働していくべきと思います。

色々な活動事業を少しでも学び、活動してくれるボランティア団体の育成と専門職員の育成が成功の鍵になると思われる。

学びの多い視察であった。

B 佐賀市の農福連携事業について 令和6年1月18日 佐賀市役所

(1) 佐賀市について

①人口 228,553 面積 431.82 km<sup>2</sup> 手帳（身体）10,493 手帳（療育）2,447

手帳（精神）2,459

佐賀県の約17%の面積を占め、約3割の人口を抱える。手帳所持者は県内の約3割に及ぶ。

②佐賀市農業の現状

地域の特性を活かした農業

・経営耕地面積 10,600ha（平坦地域9割：中山間地域1割）

・耕地利用率 165%⇒全国トップレベル

水稲 52.4% 大豆 26.6% 麦 66.9% 他

農業従事者数

農業従事者数は、年々減少し、高齢化も進行している状況。特に農業生産条件の不利な中山間地域は顕著。

(2) 農福連携について

農福連携を知らない人が約7割と多く、また、知っている人の中で、取り組まない理由は、制度に対する知識不足からくる不安が4割と高いことから、制度の内容、事例などの周知を図っていく。（佐賀市農業基本計画の見直しに伴うアンケート結果）

「参考」農業における労働力不足の実態調査

平成 30 年度 労働力に困っている 50% 労働力に困っていない 50%

### (3) 佐賀市障がい福祉課の取組み

平成 29 年から、「佐賀市障がい者就労支援施設等異業種連携推進事業」として、

「佐賀中部障がいふくしネット」に補助金を交付

「目的」農業などの福祉分野以外の業種との連携推進をはじめ、福祉商品の売上げ向上及び障がい者への理解促進を図るための活動を支援することによって、障がい者工賃の更なる向上を図る。

「事業内容」福祉分野以外の業種との連携の推進する事業・・・農福連携事業

●農業等との連携によって、障がいの特性に応じた作業や一般就労に向けた体力・精神面での訓練を行い、障がい者の能力や意欲の増進。

●福祉商品の売上げ向上や障がい者への理解促進の取組みを引き続き行うことによって、障がい者の工賃の向上。

### (4) 佐賀中部障がい者ふくしネットについて

従業員 34 名

加盟 37 法人 51 事業所

設立 平成 14 年

活動の目的 障がい福祉活動を支援する者に対して、情報共有化のためのネットワークを構築し、各種研修・事業所支援・調査研究・施策提案等に関する事業を行い、障がい福祉の増進に寄与する事を目的とする。

## (5) 佐賀市障がい者就労支援施設等異業種連携推進事業

当事業にコーディネーターを配置し、官公庁および民間向けに、市内の事業所商品の販路拡大および売上向上を図り、また異業種との連携を図り農福連携事業等により、障がいのある方たちの工賃を向上させることを目的として実施した。

各事業所製品の販路開拓、企業からの仕事を開拓・共同受注している。

## (6) 農福連携とは

近年、農業分野では働き手の不足が課題になっています。

一方、福祉分野でも障がいのある人達の社会参加や収入の向上が課題になっています。農作業の一部を障がいのある人達が担うなど、農業分野での活躍を通して農業分野と福祉分野双方の課題解決につなげる取組みです。

農福連携に取り組むと・・・

- お互いの強みを活かして相乗効果を得ることが可能（双方の課題を解決）
- WIN－WINの関係を構築する可能性（利益を得て地域に還元する）

## (7) 農福連携を拡大への課題

- ・悪天候時の対応が難しい

野外での作業が出来ない場合、急な予定変更により利用者が混乱してしまう。

- ・野外で農作業する場合の体温調整や熱中症対策
- ・福祉への理解不足

## (8) 課題解決に向けて

福祉と農家の両者を結びつけ、中間支援の立ち位置にあるコーディネーターが積

極的に介入し、賃金・作業内容・作業環境などの条件面について、一緒に調整を行うことで、起こりうるトラブルを未然に回避します。

#### 視察の所感

農家さんの「ありがとう」、「助かるよ」の感謝の言葉が、障がいのある方の仕事のやりがいになる！

人手不足解消のためだけではなく、「福祉への理解」、「福祉に寄り添う気持ち」などお互いを思いあうことが農福連携の成功につながります。

との最後の言葉に今後の可能性を感じました。

障がいのある人達にも個々の障がいのレベルと症状の違いにより、その時々に対応を支援者が間に入って行うことで関係を保っている所が、難しい状況のようにありました。しかし、一歩ずつ前進している成果を聞かせていただきました。

農業生産から農産物の加工までは進んでいる状況ではないようですが、障がい者の仕事分野を拡大するには必要な方向と感じました。

また、福祉事業所自体が、農業生産・加工・販売までを障がい者と共に働く体制は、少ないとの事でしたが、拡大分野の一つと感じました。

丹波市においても「農福連携事業」体制の支援確立をより具体化する必要があると思います。